慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	フェルヂナンド・ラッサルと独逸労働者（一）
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1917
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.11, No.5 (1917. 5) ,p.604(24)- 611(31)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19170501-0024

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

フエルヂナンド、ラッサルと獨逸勞働者（一）

小泉信三

（一）

フエルヂナンド、ラッサルの生涯と其の獨逸勞働者に與へたる影響とに就て語るに先だち、豫め準備の爲め二三の事項に關して讀者の注意を促して置く必要がある。而してそれは恐らく自分が何故にラッサルの生涯を傳ふるかの理由を説明し、併せて彼れの人物と事業とを觀察批判するに當り、予が如何なる立場に立つて之を爲すかを明かにする所以であらう。云ふまでもなく自分は煽民家（アジテエタア）――と云ふ言葉が不適當ならば勞働者首領（レエバアリイダア）――としてのラッサルを此一篇の主題とするのである。ラッサルは多能多才の人であつた。彼は其の短かき生涯の最後の二年を勞働者運動に捧げた外に大部なる哲學上法學上の著述に依て獨乙當年の學界に知られ、更に一篇の戯曲を公にし政治上、外交上、文藝上の時事問題に關して多くの小冊子を著した。併し乍ら彼が死後に殘した最も大なるものは其社會運動の上に於ける事業なることは何人も之を爭はぬ。彼れの煽民家としての生涯は極めて短かつたけれども此短日月の間に彼れは多くを爲した。千八百四十八年の三月革命が鎮壓されてから十餘年を經て、所謂「新時代」に於ける社會主義運動は千八百六十三年三月一日、ライプチヒの勞働者委員會に與へたるラッサルの「公開答狀（オツフエネスアントヰルトシユライベン）」を以て始まると云はれて居る。此「公開答狀はやがてラッサルを總裁とする全獨乙勞働者同盟（アルゲマイネドイツチエアルバイタアフエライン）の組織を促し、而して同盟は後にベエベル、リイブクネヒトに依て起こされたる勞働者組合聯合會（フエルバンドデルアルバイタアフエライン）と提携し、幾多の波瀾を經過して遂に今日數字上の勢力に於ても規律と統一との點に於ても世界第一の稱ある獨逸社會民主黨を作るに至つたのである。これ今日社會民主黨が全獨逸勞働者同盟創立の日を以て自黨の記念日とし、且つ屢々社會民主黨は思想上に於てはカアルマルクス、實際運動に於てはフエルヂナンドラッサルを父とすと稱せらるゝ所以である。ラッサルの傳記を語る理由は恐らく此事實丈けで充分であらう。其私生涯に何の波瀾なく、其性格に何等顯著なる特色がないとしても、社會民主黨の創立者（ラッ

サルを社會民主黨の創立者と呼ぶには樣々の條件を附けねばならぬけれども）の生涯は傳記に値することを讀者は否まぬであらう。而かもラッサルの場合に於ては其公人としての事業に錄す可きものが全くないとしても猶且つ其の複雜にして、矛盾に富める性格と、主として其性格の爲めにラッサルが經歷しなければならなかつた、幾多の戲曲的若しくは小說的葛藤は優に一般の傳記讀者を樂しますに足るのである。彼は幾度か人と爭ひ、幾度か法廷に引かれ、幾度か監獄に出入した。其上に讀者を喜ばす可く彼の傳記には多くの女性が現はれる。就中其中の二人は殆どラッサルの生涯を左右したと云つても好い。即ちハッツフェルド伯爵夫人は彼の半生の經歷を定め、今一人のヘレエネフォンドェンニイゲスの爲めには彼は決鬪して自ら命を縮めたのである。自分は今此處で是等の點に就て詳しく述べる必要はない。彼れの性格閱歷が演劇傳奇の題材たるに適して居ることを證明する爲めには現に彼れを主人公にして作られた、小說二篇を擧げるを以て足れりとする。自分は特に蒐集に努めた譯ではないからラッサルを題材にした小說がまだ此外にもあるか否かを保證しない。玆にはたゞ偶然目に觸れた二つを紹介するに過ぎないのである。英人 George Meredith の「喜劇的悲劇家」"Tragic Comedians" と獨逸人 Schirokauer の「ラッサル。自由と戀愛の爲めの生涯」Lassalle. Ein Leben für Freiheit und Liebe とがそれである。メレディスの作はラッサルとヘレエネとの關係を主題に取つて居る。作中の人物は何れも名を變へて現はされてあるけれども主人公 Alvan がラッサルなることを推測するは少しく事實を知るものには極めて容易の業である、シロカウエルの作は所謂歷史小說である。驚く可く忠實に史實を網羅して居る。それ丈け小說としての描寫は拘束を受けて居るが事實を知ることから受ける面白味は或程度まで之を償ふことが出來る。

ラッサルの生涯が傳奇的演劇興味に富み、現に一二の文學者に依て小說の題材に擇ばれたと云ふ事實を何故に特に擧げて讀者の注意を求めるか。之れが單に好事から出たものでないと云ふ事丈けは玆に說明して置く必要がある。自分が敢て之を爲すは小說戲曲の題材たるに適するラッサルの性格閱歷は勞働者首領としての彼の成功（若しくは不成功）と決して無關係ではないと信ずるからであ

る。一個の學者を捉へ來つて其學說の學問上の價値を批判することを主眼として其生涯を傳へる場合には是等の事實は閑却しても差支ない事實である。學者思想家の傳記を編むに當つて吾々の第一に努む可きは其著作を通じて窺はれる學說思想其物並に其變遷を精確に記述し、其價値を歷史的に判定することである。而して彼が其學說を形くるに當つて如何なる人、如何なる書籍、如何なる境遇等の影響を受けたかを明にする爲め必要なる限りに於て彼れの父母、家庭、交友、生活狀態及び閱歷は吾々の興味を引く。固より例へばアダムスミスの生涯に起つた大小もの事件は假令それが國富論の一行一節と何等の關聯を有つて居ないとして猶且つ吾々は切にそれを知らんことを希ふであらう。同樣にカアル、マルクスの數奇なる流寓生活が生んだ幾多の逸話（アネクドオト）はそれが「資本論」と全く無關係のものであつても吾々はそれに對して大に興味を感じるであらう。それは否まぬ。たゞ是等の事件逸話は學說を評論する場合に於ては必しも閑却するを妨げぬと自分は云ふのである。併乍ら勞働者首領としてのラッサルの場合に於ては事情は些か異なる。彼れが獨逸勞働者に與へた感化と引いては全獨逸勞働者同盟運動の成

敗とは、變化に富める彼れの閱歷と複雜多感たる彼の性情とから全く離れて說明することは出來ないのである。最も著しい一例として決鬪による彼れの最期を擧げることが出來る。決鬪の原因は一個の戀愛事件である。而かも獨逸勞働者は此死を悲壯化しラッサルを以て政敵の陰謀に斃れた殉難者としてブレスラウに葬つた。獨逸勞働者の一部に久しく殘つた殆ど狂信に近きラッサル崇拜（クルツス）は彼れの「悲壯なる」最期と相離しては了解することが困難である。彼れの「公開答狀」に現はれたる賃銀鐵則や生產組合の主張、又は「勞働者綱領（アルバイタープログラム）」中に說かるゝ支配者階級隆替の說と全く何等の關係がないことを知りつゝ自分が彼れの決鬪事件に就ても敢て若干頁を費やさなければならぬと信ずる理由は茲にある。

勞働者首領（レエバアリイデア）は必しも深き思想家たることを必要としない。併乍ら勞働者首領に欠く可らざる資格は決して單に魅力ある性格言動、及び民衆の熱情を刺戟し鼓舞する、技術のみを以て終れりとすることは出來ないのである。永續的に秩序的に民衆を動かさんが爲めには徒らに彼等を鼓舞し激勵する丈けに止まらずして抑も何故に又如何なる點に於て現在の制度は不正當（ウンゲレヒト）なるか、從て何故に現在制度

を破壞するは倫理上の價値を實現する所以なるか。而して又現狀打破の目的を達するが爲めには如何なる方向に向つて努力せざる可らざるかを多少論理的に首肯させなくてはならぬ。即ち、理論家決して煽民家として成功するものではないけれども大なる勞働者首領は必ず理論を有つて居なければならないのである。さて此點に於てラッサルは如何なるものを有つて居たか。彼れが獨創的なる理論家であつたか否かの點は後段の記述に依て自ら明かにされるであらう。此にはたゞラッサルは彼の名に依て記憶せらるゝ二三の理論を獨逸の社會民主主義運動に貢献した事丈けを記すに止める。是等の理論が如何なる價値を有し、又其れがラッサルの死後社會民主黨に依て如何に取扱はれたかは吾々に最も興味ある問題であり、同時に經濟學に志す吾々に取つて比較的意を安じて議論し得る問題である。讀者は自分が最も多くの紙數を此問題の爲めに費やすことを諒恕するであらう。ラッサルに就て書かれたるものは甚だ多くして列擧するに勝へない。

ラッサルに依て書かれたもの丈けを數へれば、其全集としては社會民主黨中の學者エドアルド、ベルンシュタインの編集に係る Ferd. Lassalles Reden und Schriften. Mit einer biographischen Einleitung, herausgegeben von Ed. Bernstein. 3 Bde, Berlin 1893 は著書、論文及び演說速記の公表せられたるもの全部を收めて最も信憑するに足る。此外にまだラッサル少時の日記と書簡の公にされたものがある。日記は Paul Lindau, Ferd. Lassalles Tagebuch Breslau 1892 である。書簡の中マルクス及びエンゲルスに與へたものはメヒリング編纂の「マルクス、エンゲルス、ラッサル遺稿」Aus dem literarischen Nachlass Marx-Engels-Lassalle; herausgegeben von Fr. Mehring. Stuttgart 1913. に收められてある。其父母に與へたるもの、Rodbertus-zagetyow に與へたるもの、Haus von Blüow に與へたるもの Georg Herwegh に與へられたるもの等何れも公にされてあるけれども、自分は其の公にされてあると云ふ事實と其内容の或部分とを他人の著書を通じて知り得たに止まる。